

チベタン・パルシング・ヒーリング

パルス（脈拍）を通してヒーラーと受け手がシンクロするとき、そこに「ハートの力」が流れ、ネガティブな生体電気エネルギーを洗い流し（癒し）が起きる

チベタン・パルシング・ヒーリングとは、パルス（脈拍）の力を使って心と体の深いレベルに働きかけるチベット発祥のテクニクで、本来チベット仏教の僧院でのみ行なわれていた秘儀を現代的にアレンジしたものである。

チベタン・パルシング・ヒーリングの考え方では、人が肉体的・精神的に傷つくような体験をしたとき、その「痛み」が体の特定の臓器にネガティブな静電気を生じさせるといふ。これは同じ痛みを繰り返さないためのヨロイの働きをするのだが、その反面、人間の自由を束縛する条件付けともなりうる。

そこで、このヒーリング・テクニクでは、ハートのパワー、つまり脈拍を使い、生命電気エネルギーをハートの支配下に置く。そして各臓器や細胞にとどこおっているネガティブな静電気を洗い流していくのである。その結果「痛み」は「快」へと変容し、ネガティブな静電気によって保持されていた条件付けは消えてしまう。

具体的には、セッションの最初にまず瞳の虹彩のヒーリングが行われる。眼は脳と直結しており、まさに「心の窓」といえる。虹彩にはさまざまな過去の傷が記憶されていて、そこから得られる情報にヒーラーの直感が加わってヒーリングに必要な内容がヒーリングされる。体には二十四ヶ所の神経組織と臓器に対応した電氣的スポットがあり、各臓

器はそれぞれ特異的な行動パターンや感情エネルギーと関連しているわけだが、ヒーリングによってどの部位に働きかけるのかを決定するのだ。

ヒーリングに入ると、まずヒーラーは手足を使い特定の動脈のポイントを圧迫し、シンブルなマントラを受け手とともに数回唱えることで、互いのエネルギーをシンクロさせる。ときにボンピングという動きを加えエネルギーを活性化していくが、ヒーラーは一貫して瞑想的な意識を保ち、受け手のパルス（脈拍）を感じ続ける。そうするうちにヒーラーと受け手のパルスが同調しはじめ、同じリズムで脈動するようになるのだが、このとき二つのハートが溶け合い、そのエネルギーが大きくなるとなり、各臓器や細胞にため込まれたネガティブな静電気が押し流されていくのである。

この瞬間、えもしれぬ至福感を感じる人や、なんらかのヴィジョンを見る人、また痛みを追体験する人もいるというが、共通していえるのは深くパワフルな瞑想状態とリラクゼーションが得られるということだろう。

また、チベタン・パルシング・ヒーリングは肉体レベルの癒しにとどまらず、アストラル体やさらに微細なレベルのエネルギー体にも影響をおよぼし、過去の生の精神的・肉体的な傷を癒すこともできるといわれている。

全二時間のセッションで、約三十分

が瞳のヒーリング、約一時間がヒーリング、その後の約三十分が深い瞑想状態から徐々に目覚めるのを待つ時間にあてられている。ヒーラーによる直接刺激が終わってからは、体のさまざまな部位に生体電気エネルギーが放出され、痛みやしびれに似た一過性の症状を感じることもあるが、ヒーリング後二十分ほど経つと消失するので心配はいらない。

現在、チベタン・パルシング・ヒーリングはインド・ブナナの和尚コミュニティ・インタナショナルが世界中の和尚冥想センター、または和尚のサニヤシン（弟子）によるセラピー団体で受けることができる。

個人セッションではすべてをヒーラーに任せることになるが、ワークショップではリーダーの指導のもと、参加者が交互にヒーラーの役割をこなすことになる。

また、和尚コミュニティでは、さらに深く学びたい人のために、チベタン・ヒーラーへの登壇門として「インテンシヴ」というワークショップが用意されている。ここでは具体的なヒーリング法や瞳のヒーリング法、さらに各臓器に対応したムドラー（手印）やマントラ、音楽などについて学ぶ。

チベット仏教に連綿と伝えられてきた秘儀を再体系化したチベタン・パルシング・ヒーリングは、このように秘教的な魅力にあふれている。しかし、癒しをもたらすのはあくまでも「ハートの力」であるということ忘れてはならない。愛が流れるとき、そこに癒しが起こるのだ。

ドラゴンのところに行け！

チベット仏教の僧院だけに代々伝えられたこの神秘的なヒーリングテクニクはどうやって公けにされたのだろうか？

約二十年前、アメリカ人のスワミ・シャナム・ディライジはニューヨークでドラッグと暴力にあぐらをかきながら生活していたが、ふとしたことからチベット仏教の僧と出会いヒーラーへの道を歩むことになる。そしてチベット仏教のカギユ派の総帥カル・リンポチエからチベットの秘儀を伝授された。その後、彼は、そこで学んださまざまな技法を現代的に体系化していく。

四、五年前、カル・リンポチエがこの世を去る時、ディライジは「この秘儀を持って『ドラゴン』のところへ行くように」と指示を受けた。

最初（ドラゴン）の意味がわからなかったディライジだったが、ある日ビデオで見た和尚（バグワン・シュリ・ラジニシ）こそが（ドラゴン）である、との直感を得て、和尚の弟子となりそのコミュニティでチベタン・パルシング・ヒーリングの伝授を始めたのである。以来、チベタン・パルシング・ヒーリングは和尚コミュニティの中でもっとも人気の高いヒーリングのひとつとなっている。

体験レポート

(医師・35歳・女性)

てつきり茶褐色のローブをまとったチベット僧に会うのかと思っていたのですが、現れたのはデンマーク人の女性。髪が長く笑顔がチャーミングで、踊るようなしぐさに緊張がさっとほぐれます。

和尚ラジニージのゴミュンで、スワミ・ディラージから五年前に伝授され、四年間、この療法をしているそうです。まず、瞳を見てリーディングをしてくれました。ライト付ルーベを持って、顔と顔をびったりくっつけ、両方の瞳からその人の性格、各臓器の状態を読みとります。ちゃんと瞳の形、色、光り方で技術的なきまりがあり、それに直感を加えて行なうのです。右眼からは左脳、男性性、思考性、行動パターンなどを、左眼からは、女性性、芸術性、感性などを読みとります。おもしろいのは、読んだ内容を四枚のタロットカードで見せて解説してくれることです。

「とてもカラフルな人ね。たくさん体験が詰まっている。ジャーナリストに向いている。メディアに強いんじゃない？・・・ダンスが得意なの？・・・誰かにエネルギーを吸われている・・・」といった具合に出てきます。内容はほとんどびったりという感じ。たくさんの情報があふれてくるわけではないけれど、ゆつたりとリラククスしたリーディングです。

そしていよいよチベタン・パルシングの始まり。心地良いマットの上に横たわり、膝の下にクッションを、首の下に巻いたバスタオルを敷いて、ヨガの死人のポーズのように両手足を広げます。

左耳のそばでラジカセからビートの鳴り出した、心音と同調する音楽が鳴ります。「今日は腎臓の日なのでそれに合ったつばに刺激を与えて、調整し、蓄積している感情エネルギーを放出します。腎臓は女性エネルギーを司っているの」と右側の腎臓の経路にそって両手、両膝を使って脈の大切なポイントに圧迫と解放を加えていきます。左側から聞こえる音楽

と施術者の圧迫感とでかなりの刺激。パワフルと聞いていたけれど、足の使い方がみごとで、二人にやってみてもらっている錯覚に陥ります。ブドウ糖の静脈注射を受けているような、あるいは血圧を測るときに上腕を縛ってゆるめるときのような感覚が思い出されます。

次第にミクロの世界に入っていくって、施術者が私の血流でサーフィンしているようにイメージされます。脈が二倍、三倍に強く感じられます。

音楽はちゃんと刺激の度合いに合わせて静かになったり、激しくなったり、全てがシンクロしている世界。

深い深いリラククスに溶け込んでしまってもう体の感覚が薄れてしまつて、施術者が部屋から出て、まだヒーリングが続いている感じがします。首の後ろと左手の親指のつけ根に痛みを感じ出し、特に首の後ろは、大きな波のうねりが押し寄せるようで、びっくりしてしまいました。後で施術者に聞くと、古いたくさんの感情エネルギーが放出されたせいだから心配ないとのことでした。三十分は体

がしびれて動けないと前もって言われていたのですが、確かにとっても深いパワフルなヒーリングで、手ごたえは十分。ふだん気にしていない血液の流れ、脈動、心臓の働き、生きていく実感をあらためて味わい、感謝が出てきました。サーモンピンクの不思議な夕焼けを見ながら、チベットの深い神秘の世界にしばしひたつた貴重な体験でした。

